Q2 日本の生乳需給構造は？

A2 需要は増加も、生産は減少。鮮度が最も求められる牛乳が優先してつくられます。

解説 2018年度の生乳生産量は、728万トン。ピークの1996年度に比べ138万トンも減少しています。その大きな要因は、高齢化や後継者不足に加え、エサ代や燃料代の高止まり、設備の更新や投資費用の増大などを背景に、酪農家戸数が減少し続けていることです。

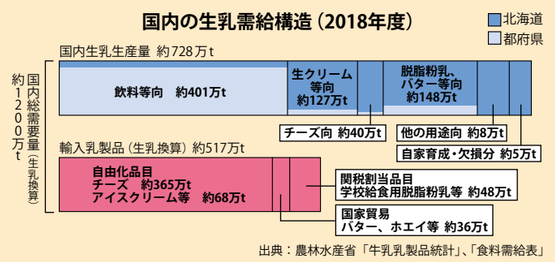
一方、2018年度の国内総需要量は1,243万トン（生乳換算）。健康志向の高まり等もあり、生乳の需要は増加しています。

国内の生産で賄えない分は輸入されていますが、「牛乳」については100%国産の生乳が使われています。

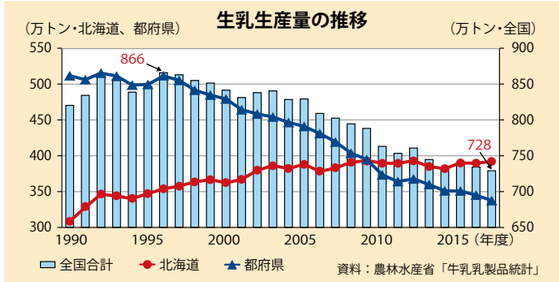
国産生乳の仕向けの内訳は、牛乳等向けが401万トン、乳製品向けが315万トン（生クリーム等向け127万トン、チーズ向け40万トン、脱脂粉乳・バター等向け148万トン）です。北海道では乳製品の割合が高く、都府県では飲用等向けの割合が高くなっています。

生乳の仕向けについては、まず最も鮮度が求められる牛乳や生クリーム等が優先され、最後にバターや脱脂粉乳に加工されます。

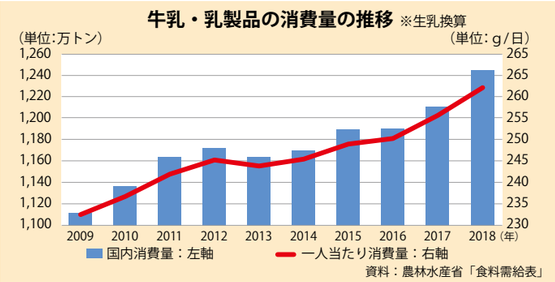
つまり、生乳生産量の増減や、牛乳等向け、生クリーム等向け、チーズ向けの需要の増減が、最終的に脱脂粉乳・バターの製造量や在庫量に影響を与えるといった生乳需給構造になっているのです。



出典：農林水産省「牛乳乳製品統計」、「食料需給表」



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」



資料：農林水産省「食料需給表」

Q3 生乳の需給ギャップはどのように調整している？

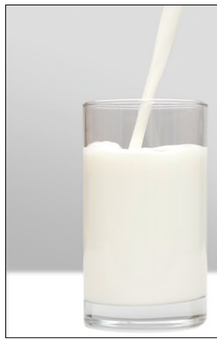
A3 指定生乳生産者団体や乳業メーカー等が、生乳の生産量や製品の需要量に応じて、用途別分配や、北海道や都府県との間の輸送等によって調整しています。

解説 生乳の生産量は季節や気温等によって変動します。乳牛は暑さに弱いため夏場は生産量が少なく、冬から春先にかけては生産量が多くなります。逆に、生乳の需要量は、牛乳向けの需要を中心に、気温の高い夏場に多く、冬場は少なくなるという逆の傾向にあります。

このように生乳は、季節や気温など様々な要因によって需給ギャップが生じるため、それらへの対応が日々求められます。しかし、生き物である乳牛から生み出される生乳の生産量を簡単に増やしたり減らしたりすることはできません。そのため、製品の需要に合わせて調整するのは難しく、また生乳は栄養豊富な反面傷みやすく、バルククーラー（生乳冷却装置）で保管する必要がありますが、その容量は限られているので、酪農家段階で貯蔵して調整することもできません。そこで、生乳の需給調整は通常、生乳の流通段階や加工段階で行われています。

生乳の流通段階では、指定生乳生産者団体等による牛乳等向け・乳製品向けといった生乳の用途別分配による調整と、北海道や都府県との間の生乳の輸送による調整が行われます。また加工段階では、貯蔵可能な脱脂粉乳・バターの製造量の増減による調整が実施されています。

しかし近年は、酷暑により生産量が想定以上に減少したり、多発する台風や地震などの自然災害で、電力や輸送網が絶たれるといった被害により、酪農家や乳業工場における生乳廃棄の発生や、北海道からの生乳輸送のストップなども起こっています。さらに直近では、新型コロナウイルス感染症による学校給食の停止など、関係者の努力だけでは解決できない事案も発生しています。



酪農家を応援してください。

新型コロナウイルスによる全国の小・中学校の休校により、学校給食用の牛乳の製造が止まってしまいました。

生乳は、乳牛の健康のためにも、酪農家が毎日搾乳しなければいけません。
生き物である乳牛を相手にするため、急に生産を止めることはできないのです。

だから、今、牛乳を飲むことが、酪農家を支えることにつながります。

どうか、ご自身やご家族の健康のためにも、1本でも多く牛乳を購入し、
飲んでいただけるよう、皆様にもご協力をお願いいたします。

今こそ、日本の酪農にエールを。

一般社団法人中央酪農会議
指定生乳生産者団体

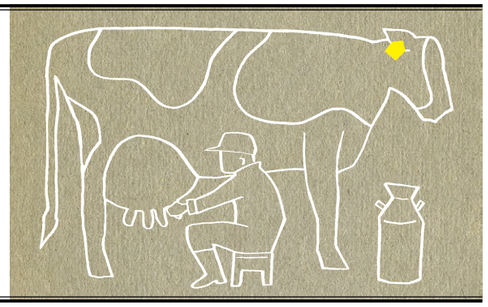
一般社団法人 中央酪農会議　〒101-0044　東京都千代田区鍛冶町2-6-1　堀内ビルディング4階　TEL：03-6688-9841　FAX：03-6681-5295

JDC NEWS LETTER

2020.4 SPRING　Vol.24

https://www.dairy.co.jp/

酪農の今をお届けするニュースレター



日本の酪農家の取り組み

父親ゆずりの頑固（がんこ）さで夢に描いた酪農を実現

茨城県 MK牧場　宮澤 智浩（ちひろ）さん・美穂子さんご夫妻

父親との対立、企業への就職、二度目の就農など、紆余曲折を経て実現した酪農の形と、そこに込めた思いとは……。茨城県の宮澤さんご夫妻にお会いし、三世代にわたる酪農一家の歩みを語っていただきました。

■サラリーマンに憧れ酪農を離れて企業に就職

茨城県小美玉（おみたま）市でMK牧場を経営する宮澤智浩（ちひろ）さんは、38年前、自分が長男ということもあり、何のためらいもなく家業の酪農に就きました。

智浩さんの父親は、外部に頼まず自分で牛舎を建て、機械を修理し、お金を牛に回して牧場を大きくしてきました。そんな父親を周囲は優秀な酪農家と評し、智浩さんもそう思っていました。しかし同時に、自分には父親のようなやり方はできないとも思っていました。

智浩さんによれば、父親は厳しく頑固な人で、自分の意見はことごとく否定されたそうです。毎日、朝から晩まで同じ作業の繰り返しで、外部と交流する時間もなく、智浩さんは、次第に世間から取り残されていくように感じていました。

就農して6年、智浩さんには奥さまの美穂子さんと二人のお子さんがいました。そのころの収入は、夫婦二人でひと月10万円。このまま酪農を続けていても家族を養う自信のなかった智浩さんは、外部から収入を得ようと考え、25歳の時に、地元の会社に就職しました。「サラリーマンに憧れ、酪農から逃げたんです」と智浩さんは語ります。

■会社を辞めて再び就農し、自分の酪農を目指すことに

サラリーマン生活は快適でした。酪農のように早起きする必要がなく、定時の夕方5時半を過ぎれば残業代が付きました。バブル景気もあって家族を養うには充分な収入を得ることができました。智浩さんは、酪農との仕事量の違いに驚き、これでお金をもらっていいのかとさえ思ったそうです。しかし、間もなくしてバブルがはじけると給料は上がらなくなり、ボーナスはカットされました。そこで初めて、会社から仕事を与えられなければ稼げないという、サラリーマンの厳しさを知ったと智浩さんは語ります。

その頃から智浩さんは、つらそうに働く母親を見かねて朝晩の搾乳を代わるようになります。会社に勤めながらの搾乳は大変でしたが、父親への対抗心もあり、サラリーマンは続けました。

宮澤さんご夫妻（中央）と牧場スタッフのサプトラさん（右端）、ウィリーさん（同2人目）、アルタワンさん（同5人目）、ロビンさん（左端）。この日、本来は休日の、アルタワンさんが撮影に参加してくれました。

哺育牛舎で子牛たちに育成用ミルクを与えている長男の豊さん。

サラリーマンになって10年を過ぎた頃、智浩さんは、父親から「酪農を辞めるけど、どうする？」と問われました。美穂子さんと4人に増えた子どもたちの生活を守るため、智浩さんは、36歳で再び酪農の世界に戻りました。

家族で話し合った上での決断でしたが、智浩さんと父親は、また以前のように衝突するようになりました。自分がやってきた酪農を続けようとする父親、そんなやり方は時代遅れだと考える息子。しかし、そんな二人の対立は、ある日突然、終わりを迎えたのです。

智浩さんが、「オレの言う通りにやらせてくれ」と言うと、父親は牛舎から出て行き、それからは牛舎に足を踏み入れることはありませんでした。

智浩さんに任された牧場には、残高が残り少ない通帳と、築40年を過ぎた牛舎、減価償却をほとんど終えた機械と牛たちが残りました。

■牛舎を建て、新規に牛を導入し 宮澤プロジェクトがスタート

智浩さんは運転資金を借り、自分の酪農を目指しはじめました。しかし、施設を整備して経営規模を拡大したいという夢はあっても、どうしていいかは分かりません。智浩さんは、パソコンを使った簿記講習に参加するなど、必要な知識を学びながら牧場の事業計画を練っていきました。

先輩酪農家からの貴重なアドバイスもあり、事業計画が出来上がり、後は資金の借り入れ審査を待つだけとなったある日の夕方、母親が倒れ病院に救急搬送されるという予期せぬ出来事が起こりました。

急には酪農ヘルパーを頼むことができず、智浩さんは、搾乳を終えてから病院へ向かわなければなりませんでした。何事かあって、自分がいなくなったときでも仕事が回っていくようにしなければ…この時、智浩さんは心に刻みます。

この件で借り入れ話は延期となりましたが、智浩さんは、全国各地の牧場を巡り、他の酪農家の話を聞き、新たな計画を練ります。何度も計算し、悩んだ末に出来上がった事業計画は、1年前とは異なるものになっていました。

この事業計画は無事に審査が通り、牛が自由に歩けるフリーバーン牛舎を新築。新規に北海道やオーストラリアから牛を導入し、自称「宮澤プロジェクト」がスタートしました。

■規模を拡大して休日を取得！ 若者にとって魅力ある酪農を！

多額の資金を借りて始まった宮澤プロジェクトは、誰からも無謀だと言われました。智浩さんは、プレッシャーに押しつぶされそうになりながらも、自分を信じて励ましてくれる美穂子さんや周囲の人々に勇気付けられ、何とか持ちこたえることができました。

幸いにも宮澤プロジェクトは、すぐに結果が出ました。MK牧場は、あっという間に一頭当たりの乳量で、県内でもトップクラスの成績を収めるようになったのです。

智浩さんが追求した酪農の柱の一つは、「牛のスペシャリストに徹する」ことでした。自分は牛の世話に専念し、飼料作物の収穫や機械の修理、牛舎の修繕などは、すべてプロの業者に任せます。

牛の世話でも、特に重要な「発情の発見」と「繁殖」のためには、努力や投資を惜しまず、発情発見機をいち早く導入して人工授精の習得にも努めました。

もう一つの大きな柱は、「休日の確保」です。牛が稼いでくれたお金で牛を増やし、売り上げを伸ばせば、人を雇うことができ、人が増えれば自分たちが休めるという発想です。

現在、MK牧場では300頭近くの牛（搾乳牛は約160頭）を飼養しており、智浩さん・美穂子さんご夫婦と長男の豊さん、研修生4人の合計7人で運営しています。労働力は6人で足りますが7人いることで、毎日、誰かが休めるようになります。

週一日は休めるようになった智浩さんは、ゴルフに出かけたり、スポーツジムに通ったりしており、時には、夫婦で一泊旅行を楽しむこともあります。「こうした自分の姿を見せることで、若い人たちに夢を見せてあげられたら」と智浩さん。

豊さんもこうした父親の姿を見て酪農に魅力を感じたのかもしれません。8年前に就農して以来、智浩さんの元で熱心に酪農に取り組んでいます。

時には、親子の衝突もあるらしく、「息子を見ていると、自分のオヤジと似ていると思います」と語る智浩さんですが、美穂子さんによれば、親子三世代、みんな性格が似ているということです。

休みが取れるようになった時点で、智浩さんの考える酪農は、ほぼ完成したそうですが、後継者問題は、これから解決しなければならない重要な課題です。この課題が解決するまで、宮澤プロジェクトは、終わらないのかもしれません。

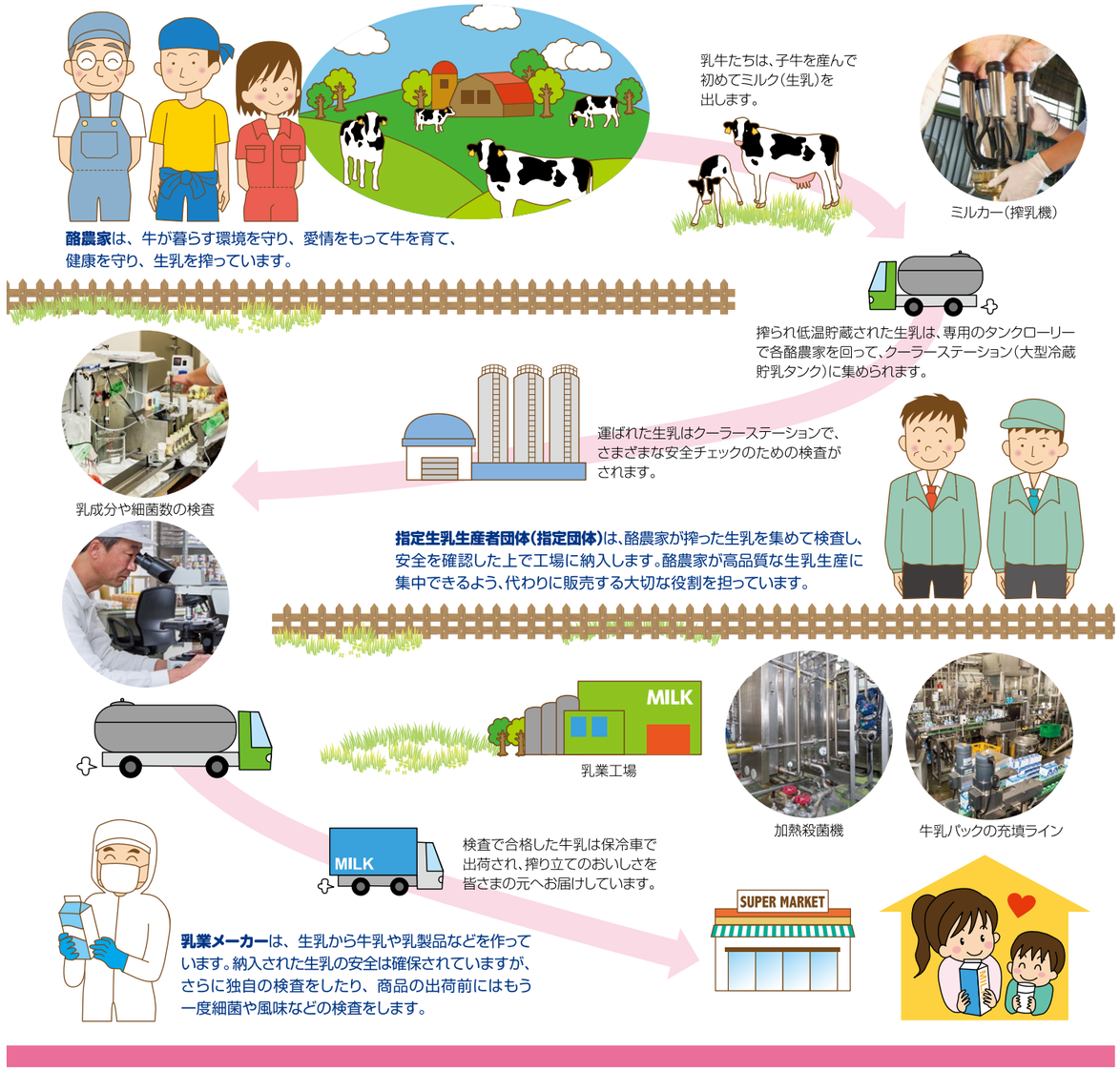
乳房炎になった牛に点滴する智浩さん。早期治療がモットーです。

知ってほしい！
日本の酪農

酪農 Q&A

Q1 「生乳」って何？

A1 酪農家が乳牛から搾ったまま、何も手を加えない乳のことです。

解説 酪農家が搾乳した生乳はすぐ冷却され、専用のタンクローリーで各酪農家からクーラーステーション（CS）という施設に集められ、さらに乳業工場に運ばれて製品となります。この、製品となったものが牛乳で、販売店の店頭に並び、消費者の皆さんに届きます。栄養豊富な反面、傷みやすいため、牧場→CS→乳業工場の各段階で、徹底した温度管理と衛生管理が行われています。

安全・安心な牛乳が届くまで